

# 序

私は初期研修の2年目に、2カ月間の皮膚科ローテーションを選択しました。それまで皮膚所見を見ても、「背部に赤い皮疹あり」しか記載できず、ずっともどかしく感じていたからです。皮膚科研修では、初めに発疹のみかた、記載方法について細かく指導を受けました。「背部に米粒大の紅斑を認め、一部は地図状に癒合している」と記載すると、確かに鑑別疾患も浮かんでくるのです。この2カ月の研修で、私自身の皮膚診療への苦手意識は払拭され、むしろ得意な気分になっていたのですが、総合診療医として現場に出ると、再び困難が待ち構えていました。それはこどもの皮膚診療です。

こどもの診療では、単に発疹の鑑別を行い、適切な処方や処置ができればおしまい、ではないのです。お母さんから、乾燥対策の相談を受け、夏になると紫外線対策の質問、「うちの子はアトピーなのでしょうか？」という悲痛な悩みまで持ちかけられるようになりました。正直、なんとなくそれらしい回答をすることはできましたが、自分自身が腑に落ちるような説明ができていくかという点、そうではありませんでした。また、感染症やアレルギー、母斑など疾患の幅も広く、体系的な学習をしていないと自信が持てない領域でした。

このような悩みは私だけではなく、周囲の総合診療医や小児科医からも多く聞かれました。そこで、総合診療医や小児科医の悩みを解決すべく、基本的で実践的な解説書を作れないかという発想が浮かびました。私の同僚の堀越健先生、そして川崎市立多摩病院小児科部長の宮本雄策先生にもご協力いただき、まずは「私たちの悩み」を共有しました。そして、本書にはプライマリ・ケアに理解のある皮膚科医の協力が不可欠です。以前から、総合診療医や学生へのレクチャーで定評のある水戸済生会総合病院皮膚科の神崎美玲先生にその役をお願いしました。

本書の構成としては、初めに総論的な基本知識として、こどもの皮膚の特性やスキンケア、発疹の記載方法や皮膚科における検査・治療方法などを皮膚科医の視線から解説しました。そして、疾患の各論については、皮膚科医と小児科医、総合診療医がそれぞれ分担して、バランスの良い構成を心がけました。また、発熱を伴う発疹については、総論としてその鑑別方法を解説するなど、診療に即した構成を心がけました。

企画のなかで最も吟味したのは、レベル設定と表現方法です。総合診療医や小児科医の悩みに合わせた項目設定や解説は、皮膚科医の執筆者には大変な作業だったと思います。何度も吟味を重ね、一番欲しい情報に手が届く内容になったと自負し

ています。

本書の製作には、企画段階から羊土社の野々村万有様，山村康高様には大変お世話になりました。この場を借りて御礼致します。現場で奮闘する皮膚科医と小児科医，総合診療医が協力した本書によって、少しでもプライマリ・ケアの小児皮膚診療が向上することを願ってやみません。

2019年2月

編者を代表して  
大橋博樹